

2023（令和5）年度 東北アジア研究センター共同研究報告書

提出 2024(令和6)年 4月 5日

代表者 佐野 勝宏

(本報告書はセンター内外への公開を原則とします)

研究題目	和文) 東北アジアの先史時代移行期における人類の行動変容に関する痕跡学的研究 英文) Traceological studies on behavioral changes during prehistoric transitions in Northeast			
研究期間	2023（令和5）年度 ～ 2024（令和6）年度（2年間）			
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	佐野 勝宏	東北アジア研究センター・教授	先史考古学	研究の総括
	王 晗	大学院文学研究科・博士課程後期	先史考古学	文献収集・調査・分析
	趙 娜	大学院文学研究科・博士課程前期	先史考古学	文献収集・調査・分析
	林 乃如	東北アジア研究センター・研究生	先史考古学	文献収集・調査・分析
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 30万円		
	外部資金(科 研・民間等)	基盤研究(A)(代表:佐野勝宏)		[小計] 930万円
	合計金額	960万円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で 専門家以外にも理解 できるようまとめて ください。)	<p>本研究は、東北アジアにおける先史時代の重要な移行期（中期旧石器時代から後期旧石器時代、後期旧石器時代終末から縄文草創期、縄文時代晩期から弥生時代）の石器及び土器の痕跡学的調査研究を行うことにより、先史時代の画期における人類の行動変容の実態を解明することを目的とする。</p> <p>2023年度は、11月に中国科学院の古脊椎動物・古人類学研究所（IVPP）を訪問し、中国のShiYu遺跡から出土した石器の使用痕分析を最新のデジタルマイクロスコープを用いて行った。ShiYu遺跡は、中期旧石器時代から後期旧石器時代の移行期に当たるIUP（Initial Upper Palaeolithic）の遺跡であり、東北アジアにおけるホモ・サピエンスの拡散と行動変容を理解する上で極めて重要な遺跡である。今回の使用痕分析の結果、着柄痕跡と狩猟痕跡を同定する事ができた。今後更に分析を進めることで、東北アジアにおける該期の人類活動の多様化に関しても議論を進めていく。</p> <p>更新世末は、東北アジアの広い地域で土器が出現する時期であり、日本列島の縄文時代草創期も該期に当たる。そこで本共同研究では、日本列島全域の縄文草創期遺跡を対象とし、年代測定データと狩猟具の数を収集した。その結果、気候が激しく変化する時期に土器の文様と狩猟具（尖頭器・石鏃・有舌尖頭器）の数に大きな変化が認められた。これにより、気候変動の激しい更新世末における人類の行動変容を解明する上で重要な基礎データを得ることができた。</p> <p>また、東北地方の縄文時代から弥生時代における前田遺跡、砂沢遺跡、二枚橋遺跡、宇津ノ台遺跡を選定し、出土土器の圧痕レプリカ調査を実施した。その結果、豊富な野生植物、大陸系イネ科植物、貝類圧痕などを検出することができた。この中、薬用野生植物の利用が顕著であり、当時の人々の植物利用の目的及び方法が非常に豊富であることがわかった。今回の調査によるイネ科植物圧痕の検出は、大陸系イネ科植物の伝来ルートの研究において重要な意味を持つ。</p>			
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	人類の行動変容の実態を解明するためには、各移行期の石器組成の変化や機能、生業形態を正確に理解する必要がある。本年度の調査では、中国科学院と連携し、中国におけるIUP資料の分析を始め、約45,000年前のホモ・サピエンスの狩猟活動の一端を解明する上で重要な成果を得た。その他、縄文・弥生移行期の土器圧痕レプリカ調査によって、東北地			

	方において稲作を基軸とする農耕社会が成立する過程をある程度明らかにすることができた。		
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など：0 回	国際会議：0 回	
	研究組織外参加者（都合）： 人	研究組織外参加者（都合）： 人	
研究成果	学会発表（4）本	論文数（1）本	図書（0）冊
専門分野での意義	[専門分野名]	[内容] 今回分析対象とした ShiYu 遺跡は、東アジア二例目の IUP 遺跡であり、その調査成果は当該地域の旧石器研究の進展に大きく寄与する。	
学際性の有無	[無]	参加した専門分野数：[] 分野名称[]	
文理連携性の有無	[無]	特筆事項：	
社会還元性の有無	[有]	[内容] NHK BS「ヒューマニエンス」出演	
国際連携	連携機関数：2	連携機関名：中国科学院、遼寧大学	
国内連携	連携機関数：1	連携機関名：明治大学黒曜石研究センター	
学内連携	連携機関数：2	連携機関名：文学研究科、総合学術博物館	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：3	参加学生・ポスドクの所属：文学研究科	
第三者による評価・受賞・報道など	The International Obsidian Conference Student Poster Presentation Award		
研究会計画全体の中での当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>本年度の調査によって、第1の移行期はアジア東部へのホモ・サピエンスの拡散と文化的適応プロセスを解明する上で有効な証拠を確認できた。第2の移行期は、各遺跡のデータベースを作成することで考古文化の時空間分布変遷を把握し、気候変動の激しい更新世末における人類の環境への適応行動を理解する上で欠かせないデータを取得した。第3の移行期は、植物利用の目的及び方法が非常に豊富であることがわかったうえ、圧痕レプリカ調査により大陸系イネ科植物の伝来ルートをある程度明らかにすることができた。</p> <p>今後は、引き続き ShiYu 遺跡や関連する遺跡から出土した狩猟具を含めた組み合わせ石器の顕微鏡観察を行い、石器の機能研究を進める。また、環日本海の各移行期遺跡の比較研究を実施するため、文物研究所や教育委員会と連携し、より広い地域における関連遺跡の圧痕調査や土器付着物の理化学分析を実施し、将来の議論に必要なデータを蓄積する。</p>		
最終年度	該当		

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

王 唅・熊谷 亮介・鹿又 喜隆・佐野 勝宏「日本列島における石鏃の出現と増加プロセス」『日本旧石器学会第21回総会・研究発表・シンポジウム』、多摩市：東京都立埋蔵文化財調査センター、2023年6月24・25日

Wang, H., Xu, T., Use-wear analysis of obsidian artifacts from the site in Changbai Mountain area, *The 4th Meeting of the International Obsidian Conference*, Engaru, Japan, July 3-6, 2023.

Wang, H., Kumagai, R., Kanomata, Y., Sano, K., Emergence of arrowheads and arrowshaft smoothers during the Late Glacial in the Japanese islands, *The International Union of Prehistoric and Protohistoric Sciences*, Timișoara, Romania, September 5, 2023.

王 唅「日本縄文草創期（旧-新石器時代移行期）の石器使用痕研究」『西北大学—比較考古学：国際視野と先端方法シンポジウム』、西安：吉源国際ホテル、2023年6月22-24日

[雑誌論文]

Yang, S.-X., Zhang, J.-F., Yue, J.-P., Wood, R., Guo, Y.-J., Wang, H., Luo, W.-G., Zhang, Y., Raguin, E., Zhao, K.-L., Zhang, Y.-X., Huan, F.-X., Hou, Y.-M., Huang, W.-W., Wang, Y.-R., Shi, J.-M., Yuan, B.-Y., Ollé, A., Queffelec, A., Zhou, L.-P., Deng, C.-L., d'Errico, F., Petraglia, M., 2024. Initial Upper Palaeolithic material culture by 45,000 years ago at Shiyu in northern China. *Nat. Ecol. Evol.* 1–12. doi.org/10.1038/s41559-023-02294-4

[その他]

*ファイル名は KyodoRpt_年度_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に 1, 2 と記入する（例 KyodoRpt_2013_oka1）。